▣巣立し小鳥（六巻）

帝キネ芦屋映畫

脚色者　佐藤青秋氏
監督者　古海卓二氏
撮影者　下村綠雨氏

――主要役割――

住職　學園　高島紅露氏
幼僧　俊學　青木某君
同（十年後）　若井信男氏
幼僧　智學　石田末廣君
同（十年後）　瀬川銀潮氏
鐘樓守喜平　小島洋々氏
孫　お久美　櫻あや子孃
同（十年後）　歌川八重子孃
俊學の父　伊藤淳兆氏
同　母　園千枝子孃

（略筋。或る靜かな田舍の山寺に生佛と尊敬されて居る住職學園と俊學智學の二人の幼僧があつた。鐘樓守喜平の孫お久美は二人の幼僧と仲睦じく平和な日を送つて居た。或る日この寺に都から訪れた夫婦があつた。二人は俊學の實の兩親であつた。十二年前この町に流浪して來た時、幼い俊學を捨てたのであつた。夫婦は俊學を返して矣れと學園に願つた。然し學園はそれを許さなかつた。俊學はそれを知つてから毎日山の頂きに登つて都の空を望んで兩親の居る都を憧れて居た。或る夜遂に俊學は家出した。殘された智學も都の生活を慕つて寺を去つた。俊學の親達は墓つて來た智學を虐げそして人買の手に賣らんと企てた。それを知つた二人は逃走した追はれる內智學は鐵橋から墜落した――十年の歲月は流れて學園は病床に臥して居たが二羽の小鳥の古巢に歸る日を待つて居た。俊學は兩親の手から放れて成功し紳士になつて懷かしい寺を訪れた。學園は一羽の小鳥の歸つた事を喜びながら永遠の眠りに就いた。その後俊學とお久美とに嬉しい日が續いた頃片眼の男がこの寺に忍び寄り惑假に咽んで居たが彼を尾行して來た刑事の爲め捕へられ引かれて行つた。その男こそ死んだと思はれた智學の成れの果であつたけれど、俊學もお久美もそれを知らず引かれ行く男を見送るのであつた。）

豫想に反して頗る整つた映畫である。古池卓二氏が舊名鎮與太平の名を名乘つて堂々鎮與太平第壹回作品と銘打つたも無理からぬ事である正に從來の古池卓二氏の作品ではない。譯りも伸々優れて居るが監督手法も手落ちなく氏の撮影監督としての技倆はこの映畫に依つて初めて認める事が出來た。佐藤青秋氏の脚色は恐らく何かの燒直しであらうが出色の出來で、ラストで智學を俊學等にあはせなかつたのも自然で好かつた。最後まで不自然さがなくスラスラと筋を運んで居る點も巧みであつた。俳優では俊學に扮した子役青木君が巧まぬ演技で巧みに見せ十年後では歌川八重子孃が美しさも演技も確かな所を見せて居る。タイトルも贅澤なものであつた　何人にも良い印象を與へる映畫である。（十月卅日、大阪芦邊劇場封切）―山本綠葉―